

# をやぐる 神戸子達

赤尾 兜子さん（俳人）

この人もサムライである。「口に特徴があるやろ……ハッハッハ」と歯の特徴をご存知である。「言わんでもわかってまっせ。と優しい眼が笑っている。この人の笑う眼が好きだ。私だけではないだろう。



KYのママ（山内小芳さん）

この人も、大きな目が魅力なのに本人は気に入らないらしい。その特徴をつかもうとしたらバツと目をふせる。バツと見るバツとふせる。一緒に大笑いをした。



畠 専一郎さん（神戸新聞主筆）

どこからとっても、絵になる顔。だから、雑作なオシャレが板につくのだろう。ネクタインをゆるめてボソボソと話をするが、ギュッと締った意見を持ってはるからコワイ。



春川 和子さん

（ラジオ関西プロデューサー）

独身だとばかり思っていたら、ダンナさんがあつた。しかも奇術の大先生である。さすがにあざやかなもの。どこにかくしていたんだろう、可愛い顔してて……。





青木 啓さん 〈ラジオ関西社長〉

年上だから先輩というのではない。“あれ、のことも‘これ、のことも教えてほしいような頼もしさを感じる。「くだらネエ事を言わずに飲めよコラ！もう……」



連載  
もうさん



柴田 旭堂さん 〈邦楽家〉

美人である。さぞかし若いときは……と思われる。「師匠さんは和服が似合いますなア」「ハーベ娘が夏で服着んといてと言いますねん」がわかってはるわかってはる。さすが宝塚女優である。私の横のピワニコニヨシをしているみたひだつた。



中川

浩安さん（宝地院）

歌、落語、はては裸踊り、このお寺の宴会は極楽である。何もかも見通しの御本尊の前で、かくしきれなく芸が出来る。お匠さんも浮かれてジャンガラ節でポンボコボン。



小林

省三さん（サヴォイのマスター）

私の「もうさん。にかんたがつたがり」の「もうさん。」は、年をもつてゐる夫のことを指す。夫の「もうさん。」は、妻のことを指す。

# をやぐる 神戸の子達

重森 守さん 〈朝日新聞集編委員〉

書きやすいと思っていたのが、どこで間違ったか、どうしてもつかめない。モタモタしていると『文章もサラサラと書けたものは生きていますね』わかつておられる。さすが事件記者のベテランですね。



ファースト・バズのママ 〈大前陽子さん〉

可愛いママが、大きなお店をきりもりをす  
る。「働き者ですねア」「魅力がありますな  
ア」「ここはこのママで持つてますなア」客  
の声をロクオノ。「ホメスギ」バー・テンの声。



松井 一郎さん 〈神戸文化ホール館長〉

「コラ、もう、おれの、老舗、をさらして何にするんだ!」と大音声でグラスを差し出す豪快な酒だ。いや、いや、もう!



安富 幸子さん

男のように仕事をする優しいお母さん。豊かなフュニキはキャンベラ号、女性と船、船と安富さんですねア。

（株）スマーフィン・マッキンノン



足立巻一さん 〈詩人〉

この人はヨワイ。「もうさん、横から描いたら一発に似てるでー」とさがる。自分の顔をご存知である。そう言われると横から描く気がしなくなって、正面から苦労して描いていたら「ワッハッハー」と笑う。



堀 郁子さん 〈シャンソン歌手〉

シャンソン教室でスケッチ。リズムに合わせてタンタカタン? と描いた。「大変結構でした」私に言ったのではない。「ハイ次はどなたですか……」シャンソン教室はにぎやかだ。



ヌーヴォのママ 〈木村美佐子さん〉

中村玉緒に似ているママ、本人はすごく気に入らないこの絵を、マスターはすごく喜こんでいる。そこで夫婦げんかが始まる。客が喜ぶ楽しい店である。



鈴木 洗さん 〈六甲音楽学院々長〉

傘の金のメンバ。宝塚の音楽の先生、美人ばかり教えていたのだからうらやましい限り。美しい顔で、美しい声の奥さんを持つ、ウナズケル、ウナズケル。

# SALON KOBE JIDAI



## ファッショントイドのミニ・サロン

月刊神戸っ子では、この度、サロンを開設することになりました。北野町、山本通界隈のファッショナブルな通りに面したコンパクトなたまり場です。

スナック・スタンド風のサロンということになります。名前は新しい神戸時代を目指して“神戸時代”という風変りな名前をつけました。

神戸っ子の憩いの広場であったり、談論風発のサロンにもなり、ミニパーティがひらかれたり、ミニ発表会が行われたりで素晴らしい情報交換の場になります。

何卒お誘い合せお越しください。

毎夕 5 時半開店（日曜は休み）

SALON  
**神戸時代**

神戸市生田区中山手通 1 丁目 28

シャトーコトブキビル 1 F

T E L 242-3567





解  
散  
VOL. 12

解  
散

岡田淳





# どこで飲むか？

竹田 洋太郎

（在ニューヨーク）

え・たかはし もう



筆者



神戸では毎晩、まちがいなしに毎晩、町のどこかで飲んでいた私が、ニューヨークへきて、いつたいどんなところで飲んでいるかは、なん人かの友人の好奇心的と見えて、ときどき手紙で「ノンデマスカ？」という質問をいただきます。

答えは「ノンデマス」——しかし、神戸にいたときとちがつて、どこで、だれと、どのように、ということになると、神戸とはやはりちがいます。ただ、私はどうかということは別にして、ニューヨークではここにいる日本人はどこで飲むか、という点にしばります。

まず、会社の帰りにオデンかなにかで、ちょっと一杯やる——こういう飲み方は米国人のサラリーマンもやります。オフィス街にはそういう人たちのタマリになる店があつて、生ビールと、好みのソーセージとか軽いサン・ドwich、その生ビールも、友達三人くらいなら、一ガロン入りの超大ジョッキを注文して、適当につぎながら飲むのも楽しいのです。

こんな店は日本と同様、グランドセントラル駅（日本の人商社マンはここから郊外へ出る列車で通勤する人が多く、彼らはここを『グラセン』と呼んでいます。サンチカウエロク等と同じ呼び方です）、ベンセントラル駅、西へはバスによる通勤だと、ポートオーリティ（港湾公団）経営のバスター・ミナルといったところのビルや、

地下の商店街にたくさんあります。私はニュージャージーへ帰るので、ポートオーリティにいきますが、このターミナルだけでも、チャンとしたバーが三軒。その一つは生のハマグリやシーフードにはカキをたべさせ、それでビールかマチニをイッパイ、となるわけです。

私がよくいくのは、バスのプラットホームに近い二階のバーで、カウンターで立ち飲みもよく、イスにすわるのもよし。ただ、たべるものはなく、ツマミのブレッツェルか、クッキーに勝手にピーナッツバターをつけてたべるのがサカナ。これはタダ。水割り一杯（スコッチ）一ドル三〇（税込み）。これにチップを二〇セント見れば、大体一ドル五〇と見ていいでしょう。

ここでパートタイムで働いているオバサン（といっても私より若いが、そんな感じ）が、私がいくと「ハイ・ハニー、マーチニー、アズユージュアル？」——いつも？ といった調子でもってきてくれます。どういうものか、ニューヨークでも酒飲みは貝類が好きらしく、イタリア系の店で、ハマグリや、ときにはイカのフライに唐ガラシのきいたイタリアンソースをかけたのをサカナに、ワインを飲むのも安くいいものです。

もちろん、高級な方では、クラブ組織で、店の構えから、マネージャーの服装まで、すべて禁酒時代をかたどり、古いスタイルのジャズにあわせて女の子が足をあげ

てくれるところも、夜の十時ごろからいいところです。さて、これが普通のサラリーマン。日本人、ことにこちらで働いている人となると、また別の場所があります。私の会社の近くにも日本料理店にバーがある。つまり、テーブルの場所とは別にカウンターで飲む場所があります。これは、酒類（蒸留酒、ウイスキー等）を売るライセンスをもつてている店には必ずある。もう一つのライセンスは、ワインとビール（醸造酒だから日本酒もある）を置く店。そのうちのウイスキーを飲ませる店で、会社の帰りにトグロを巻いていると、顔見知りの日本人が、「ヨウ、竹田さん、おげんき」などといって、アメリカ風にビールのおこり合いをしてると時間のたつのを忘れ

「ニューヨークで海軍軍歌をやりたいね」



る。こういったところで「オーノヨーチャン」と呼ばれて驚いたのが、たまたま食事に来ていた神戸の写真家の西村雅司さん——といったこともあります。吉兆、しんばし、稻ぎくなど高級日本料理店にも必ずこうしたパーティがって、満員のときは席の空くのを、ここで待つという仕掛けになっています。

もちろん、こんな店で刺身やヌタ（こんなものを好む若い人は日本でもこちらでも同じ）、冬は湯豆腐、夏は冷奴、日本酒は灘のものを注文して、オダをあげてもいいわけですが、近ごろ日本料理店のお客の三分の二は米国人で、いとも静かに女性と語り合いながら食事をしているから、大きな声を出すわけにはいきません。

そこで十時ごろとなれば、若い人、社用族、つまり米国人の取引先の接待、それにウサバラシ（外国に住むと、このウサバラシが時には必要）が出かけるところが日本人向けビアノバー、となります。いつみれば、神戸の外人がウサバラシに米英の軍歌や校歌、ナツメロをどなつていてデイキシーランドのちょうど裏返しで、古いところでは「有楽町で逢いましょう」から、直輸入の小坂明子の「あなた」まで、お客様の下手さを伴奏でおぎなって、司会兼演奏をしてくれる女性をかこんで、飲みながら歌うというのがこうした店で、中には日本同様、「アーラ、いらっしゃい、お久し振り」と横へすわってくれる女性もいる店がずいぶんふえました。本当はこれニューヨーク市の条例では処罰されるんですがね。

だがこんな特殊な店は手段もときには銀座のみ。比較的安いところもありますが、とくに独身、あるいは単身赴任の男性にとっては、必要欠くべからざる店でしょう。神戸の作家、杜山悠さんみたいに、日露戦争の歌「戦友」を最後まで歌つて、なみいる日本人をシーンとさせてしまつたある商社の支店長もありました。というとかはしもさん、いっぺんニューヨークで歌つてみたいと思うでしょう。



## 映画音楽始末記

淀川長治（映画評論家）

明治二十六年（一八九三）にアメリカのエジソンが活動写真のはしりのキネトグラフを発明したころには、ドイツもフランスもイギリスもソビエトも、実はみんなそんなモノを発明していたのであった。

文明開化というものはどこか同時に、なんとなく一緒に生れてくるものらしい。

やがて大きな白布（スクリーン）にこれを映写して、みんなが一緒に見られるようになったのが明治二十九年のニューヨーク。それより先きの明治二十八年のフランスはパリ。

その明治二十九年に、神戸の神港俱楽部が日本最初の活動写真の初公開をした。

画面に水まき電車が現れると、見物の連中はすそをまくって立ち直った。びしょ濡れやとビックリした。

このように活動写真是ほんまみたいに見物客を驚かせた。

つまり活動写真こそアリズムをもつてこの世に誕生した。そのため実はこのマカフシギなる科学の発明は、その最初から「音」をも求めて苦心した。

それで早くも明治二十九年。ドイツはオスカーメスターの発明に依る「ビオフォーン」。フランスはメリエスによる「トーキー」。アメリカもまたエジソンに依る「キネトフォーン」を公開したのであった。

写真が動くだけでは我慢できなかつたということは、実にずうずうしく懲が深い。

やがてこのキネトフォーンは大正二年（一九一三）日本でも公開された。だから今年八〇才を迎えた御老人などは、すでにトーキーを六〇年前に早くもこれを見て聞いていらっしゃつたのである。

かく申す私も兵庫の大仏さんと呼んだその大仏の寺の境内でこれを見物したものだ。

それは天幕の移動映写興行のごときもので「さあ、いらっしゃい、いらっしゃい」の呼び声につられて覗いたのであつた。それは私の六才くらいのころゆえ数えると大正



「アマルコンド」(右)「カモメのジョナサン」(左)。

ドがうまく合致しなくて、これは沙汰止みとなつて……。大正からその大正の終りまでがサイレント（無声）時代。

そして大正十四年（一九二五）にいたり日本での初公開（アメリカでは大正十二年）のリー・デ・フォレスト発明の「フォノフィルム」でトーキーはついにフィルムから音を発する時代を迎えた。これを私はこの年の十月だったと思う、神戸の聚楽館でビックリ胸高ぶらせて見て聞いた。

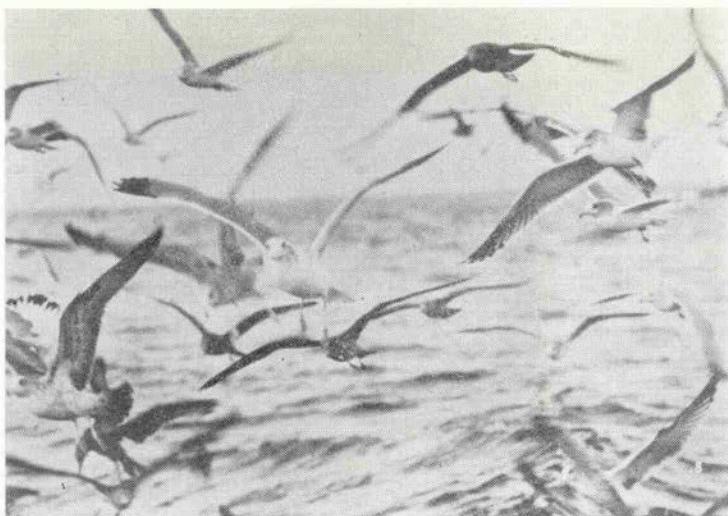
それから五〇年。今や映画はその主題曲を楽しむどころか、その音楽が映画芸術の生命のすべてみたいになつちまつて、「かもめのジョナサン」「アマルゴルド」も、いやあのサイレントの王様のチャップリン映画でさえ「街の灯」をあのメロディをもつて泣きに映画館へゆくありさまだ。

それではサイレントのころはさぞや音楽とはまったくの無縁とは、まさか思われはすまいが、さぞかしつまらん（音楽）ものであつただろうとは……大まちがい。

映画を愛し、そのシーンの伴奏音楽に酔つた人々はさつそくその映画館に電話をかけ、その楽譜を手に入れて、自宅のピアノで演奏したものである。

もつと熱心な神戸のある家庭では、ついにその映画館の伴奏樂團を劇場がはねた午後十一時からあらためて我が家に招待し、なにがしかの御礼金を用意してあのシーンこのシーンの音楽伴奏を演奏してもらい、映画の中のパートイ場面のそのジャズ演奏の伴奏音楽を我が家で演奏してもらつて、その夜のその客間はたちまちにしてダンス・パーティに一変という陽気さだった。

私はいま「フェリーニのマルコルド」の二ノ・ロータの音楽にフェリーニの体臭を感じてしまう。それは「太陽がいっぱい」の主題曲にアラン・ドロンの過ぎ去った青春をしのぶように、もはや主題曲はその映画の生命的の呼吸。そして映画音楽というものは、その映画感覚の鮮やかな演出の一部に成長してしまつた。



活動写真は、誕生の時から「音」を求めてリズムをもって観客の前に登場した。

四年ころだ。大正二年に東京で初公開したそのトーキー・フィルムがやがて二年のちには流れ流れて兵庫の大仏さんの境内に興行師の手をへて登場したのである。

画面の女が歌うと、わきのチクオングキから、かん高い鼻のつまつた女の歌う声が聞えて、画面の女は大きさなオペラふうの身ぶりを見せる。一回興行が十分間くらいか。

大正二年の東京帝国劇場でのエジソン・キネトフォーンは黒人のデキシー・ランド演奏、木琴合奏、イタリア・オペラ団の一場面、それに尺八、剣舞に日本語の演説などというプログラム。その演説とはこのキネトフォーンの解説であつて、とくに日本送りのフィルムに加えたものだつた。

しかしやがてフィルムの映写とコードの回転スピード

# 女体世界

△29△

H・ジュニア  
え・浅野俊一

## ベニスの女

ローマからフィレンツエを経てベニス行きの観光バスに、通称アンナちゃんというジーンズルックの可愛いガイドが同乗した。ガイドというのは名目だけで、彼女は黙つて座っているだけ。しゃべるのは日本人のガイドだが、日本人はガイドといわず、通訳ということになっている。観光バスには必ずイタリア人ガイドの同乗を義務づけることは、観光立国のイタリアの苦肉の一策だろうが、アンナのような美人が同乗してくれる場合は、H・ジュニア氏は大歓迎である。

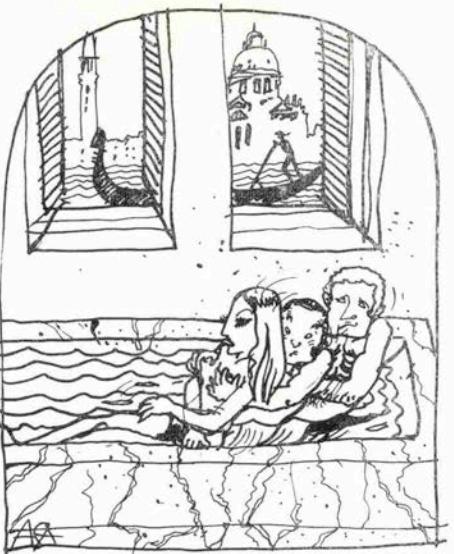
彼女は長い黒髪、つぶらな黒目、広い額と、ヒデとロザンナのロザンナのような顔立ちの典型的なイタリア美人である。彼女は二十才といつたが、コリコリした芯のある、花にたとえれば、まだ蕾の若やいだ体つきだ。少年のようにスッキリと引締った腰は魅力的だ。H・ジュニア氏は、その腰を見たとたん、去年の暮れ、神戸の〈井戸のある家〉で、マカングッサールのクリスマススペーティで同席した三輪明宏の腰を想い出していた。純白のドレスに包まれた彼の腰は、少年のそれのように美しかった。彼女の腰も堅くいうしかった。確かに男心をそそる腰だ。

H・ジュニア氏も、バスが古都フィレンツエを出る頃には、内心、相当食指をうごめかし始めていた。その証拠に、バスが途中、レストハウスに停つたのを幸い、彼はトイレに立つてから、座席に戻るふりをして、彼女のはばまで歩いて行き、ちょうどバスのひとゆれ動き出したとさくさに、よろけて行き、彼女の額にキスしてしまつた程だ。一瞬の出来事で、アンナは抵抗するすべもなく、かすかに耳元を赤らめたように見えた。H・ジュニア氏は、人なつっこいひとみで、彼にやさしい笑顔を見せる彼女に、妹に対するような特別の親しみを覚えてしまつたのである。

一方、運転手のアントニオ氏は、がつちりした長身で角張った男らしい顔立ちに真黒の色メガネをかけている。陽に焼けた顔の表情は精悍そのものだった。この種のイタリア男が大抵そうであるように、彼もシャツのボタンを上から三つはずして、自慢の胸毛をモシャモシャ見せていく。たくましいかり肩で、大きなハンドルを如何にもねじ伏せるといった恰好で、高速道路を、フィアットの大型バスをぶつ飛ばした。見た目の腕もたくましいが、ドライブの腕も立派なものだった。確實で、スピードで、心地よい。要するに乗客には快適である。頼り甲斐がある。H・ジュニア氏も、自然に彼に好意を持つてしまつた。トレイレット休憩の時、冗談半分に、彼の胸毛をさわつたことから、アントニオは、H・ジュニア氏と目が合うごとに、流し目で、につこりウインクし始めた。休憩などで乗降りの際、アントニオは、イタリアーの特有の気さくさで、女性の手をとりサーキュイスに努め、普通、男の客の手は取らないが、彼は、H・ジュニア氏だけは、強く手を握つてエスコートしてくれるのである。

こうして、バスが水の都ベニスに着く頃には、アントニオとH・ジュニア氏とアンナちゃんとはそれぞれある特別な親密さで結ばれていたのである。

三人は、その夜、ホテルの近くのサンマルコ広場のカ



フェに憩うて夜のふけるのを忘れた。三日月も美しい。

H・ジュニア氏は二、三日ベニスに滞在するのだが、二

人は、今晚だけ、H・ジュニア氏と同じホテルに泊り、

明日早朝にローマへ帰るのである。

〈何とか、今夜中に、アンナをものにしなければ！〉

と、H・ジュニア氏は先程からずっとと考え続けていた。

一時過ぎ、漸く三人はホテルに引揚げたが、廊下でア

ントニオはH・ジュニア氏の肩を抱いたまま離さない。

一緒に風呂に入ろうというのである。彼の腋臭がものす

ごい。

すきを見て、H・ジュニア氏は逃げ出してアンナの部屋へ、彼女の後についてころげ込んだが、アントニオはニヤニヤ笑いながら平気で後から部屋に入つて来てバスに湯を入れ始める始末！ 彼は、何バスであれ、バスの運転はよほど得意と見える。

そればかりか、アントニオは、アンナのいる前で平気で裸になり始めるではないか？ そして、H・ジュニア氏をも促して裸にさせた。アンナは、一見、はにかんで見ているだけである。

「アンナ！」

と、H・ジュニア氏は呼びかけたが、アントニオに背後から、羽合攻めよろしく、組みつかれてどうにもならない。しかも、巨大な黒大理石のバスの底にアントニオは自ら、H・ジュニア氏を抱いたまま仰向けに寝た。

その時、アンナもまた脱ぎ始めるではないか？ 一体これはどうなっているのか？ バスの底で、H・ジュニア氏はじつと目に神経を集中した。アンナは次々に脱いで行く。

あっ！ 外人にしては平たい胸が出て來た。アンナはお乳が小さい。次の瞬間、もつと恐いことが目の前に展開した。彼女はパンティを脱いだ。H・ジュニア氏は生つぱをのんで次の光景を見た！

あっ！ アンナの股間には、何とまぎれもなく男性のシンボルがぶらさがっているではないか？ それは、異様な不思議な光景であつた。信じ難いことであつたが……。

長い美しい黒髪！ つぶらな瞳！ 他の部分は女であり、しかも、アンナがしゃがむと、男根は上手に後方にはざまれて、股間に消え女になつた。彼女は、私に背を向けて私の上に重なつて來た。アントニオは、H・ジュニア氏のバックを攻め始めた。H・ジュニア氏は否でもアンナのバックを攻めねばならぬ！

湯にヒタヒタと沈んで透ける白いアンナの下肢は、もともといい、内股といい、彼の欲望をそそる神々しい美しさであった。次の瞬間、H・ジュニア氏の全身は、後方から一本の剣で突きさされたように、足の先から頭の先まで電光が走つた。彼は必死でアンナのかわいい乳房をつかんで堪えた。

次の瞬間、湯舟に、白い雲のようなものが幾条かスーと、浮び上つて流れた。

〈ベニスの屋根の下、精液は流れる！〉

さすが、ここは水の都ベニスだ。

〈ベニスの女に、ベニスがあつて何の不思議がある



会議や商談にも最適のティールーム



奥のテーブル席ではパーティーもできる

また、スイス、ドイツ

美味しい肉料理に舌ついて歓談するのにピッタリのお店です。

新しい店“ロゼ”案内図  
姉妹店“こだま”共々よろしく

★あなたも、もうひとりのあなたと出合いませんか？（もうひとりのあなたの出合い）をテーマに、黒と白とで統一されたティーラーム＆ファンデーション専科「ブランシェール」が、神戸の街角にお目見えした椅子、心ゆつたりとした椅子、心地よい音楽、そして、熱い珈琲……。ティーラームは会議や商談の場としても、会議です。

★寒い日には  
あたたかいスイス料理を  
神戸には世界各国の料理  
が揃っているが、北野町に  
ある「スイスシャレー」は  
スイス人の経営で、本場の  
スイス料理が楽しめる。

長らく『YANAGASS』のコツク長として親しまれてきた白菊貞実さんが、このほど中山手にグリルとドリンクの店『ロゼ』を開いた。

フランスなど世界各国のワインが豊富に揃っているのも魅力（二千円～四千円）で、スイスの味を心ゆくまで楽しんでみませんか。ピール二五〇円、スコット五〇〇円、スイス料理各種一二〇〇円と一六〇〇円。生田区北野町三丁目四八アーノルドマンショングループ二二一・四三四三三・一〇・〇〇PM 日曜休み。駐車場完備。

●神戸うまいもん  
とドリンキング  
スナック&ブティック  
ロティー  
生田区再度筋町三(五)一  
三四一(一五二二三)



PetieなLOTIE

それだけではあります  
ん。店内には舶来ネクタ  
イヤ、アクセサリーの数  
々、そして、エレガント  
な女性のためにLOTTE  
Eのプライベートファッ  
ションが用意されていま  
す。

生田区再度筋町三五一一  
三四一五二二三

スナック&ブティック

●神戸うまいもん

12月7日(土)  
ファンタジック・マジックショー  
アフリカの土人もびっくり!

12月21日(土)  
? ショー(お楽しみに)

### <忘れな草の会>ご案内

この度、菅原洋一と皆様の親睦をはかる  
<忘れな草の会>が神戸でも発足しました。



入会金

900円

会費(1ヶ月) 200円(但し1年分前納)

特典 記念品、会員証、スケジュール表、会報  
などをお送りし、菅原洋一を囲む“集い”をも  
うけたりして親睦をはかります。

お問い合わせ、お申込みはエル・ヴィノまで



フラメンコの店

# エル・ヴィノ

5:00PM~2:00AM(日曜祭日12:00AMまで) 水曜日定休  
第1・3土曜日はフラメンコ舞踊のショータイム  
神戸市生田区北野町3丁目48 アニルドマンション1階  
☎ 241-1344

### MERRY CHRISTMAS

白い壁に 赤い薔薇  
スペインの夜を想う ドンファンで  
あなたのクリスマスを……。



tea & snack  
恵一子の店《ドン・ファン》

# Don Juan

am12:00~pm5:00

pm6:00~am1:00

神戸市灘区山田町3丁目1ノ5  
阪急六甲北上姫路信用金庫地下1F

Tel 821-6426

★毎木曜定休日

足立 卷一

（姉妹誌オール関西「夕暮れに苺を植えて」の執筆者）

# やちまた

上・下巻同時発売中／各巻450ページ・写真16ページ 各巻 1600円

没後八年目亡父本居宣長に捧げた不朽の名著「詞の八衛」一本居学の総師として国語学と和歌に生きた春庭の生涯——構想40年・特異な語学者を人生の機微に触れる詩人の鋭い人間観察眼で彫りあげた、新しいジャンルを拓く評伝文学の傑作。同人誌「天秤」連載のものを全編改稿し、新出の資料により増補。

東京都千代田区  
神田小川町3ノ6

河出書房新社

振電話(03)292/3711(代)  
替 東京10802

●本誌連載の小説「曲線ハイウェイ」が好評発刊！

LOVE SEX 東京文芸社 ¥730

# 愛と性

武田繁太郎著

「愛と性」は話題の「寝室」で夫婦の生生活における女の魔性を描いた著者の最新長篇。現代の若者の行動に仮託して、愛のふかさが味う性の欣び、愛と性の自然なありかたを、曲線ハイウェイで結ぶ問題作。

□好評既刊／武田繁太郎著「寝室」¥790 「芦屋夫人」¥550

